

日本英文学会九州支部第 67 回大会

期日 2014 年（平成 26 年）
10 月 25 日（土）・26 日（日）

場所 福岡女子大学

日本英文学会九州支部

〒862-8502 熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号
熊本県立大学文学部英語英米文学科
村里好俊研究室内

TEL (096) 321-6616 FAX (096) 383-3496
E-mail: murasato@pu-kumamoto.ac.jp
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2013-14 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覽

鵜飼 信光 (九州大学)
大島由起子 (福岡大学)
太田 一昭 (九州大学)
大橋 浩 (九州大学)
木下 善貞 (北九州市立大学名誉教授)
小谷 耕二 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学)
登田 龍彦 (熊本大学)
西岡 宣明 (九州大学)
馬場 弘利 (福岡女子大学名誉教授)
早瀬 博範 (佐賀大学)
向井 毅 (福岡女子大学)
村里 好俊 (熊本県立大学)
山内 正一 (福岡大学)
山田 英二 (福岡大学)

2013-14 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覽

支部長・日本英文学会理事	村里 好俊
日本英文学会評議員	鵜飼 信光
『九州英文学研究』編集委員長	大橋 浩
副支部長	三木 悦三
事務局長	難波美和子
事務局長補佐	水尾 文子
事務局長補佐	村尾 治彦
事務局長補佐	坂井 隆

福岡女子大学アクセス・マップ

〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1丁目1-1 TEL 092-661-2411 (代表)



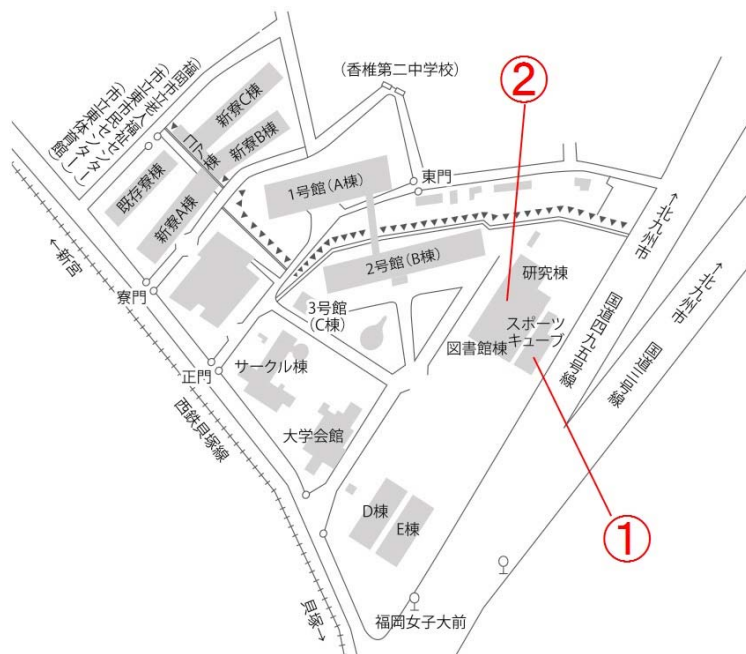
JR九州（鹿児島本線）博多駅から 香椎駅下車 快速7分、普通10分
 小倉駅から 香椎駅下車 特急38分、快速58分
 香椎駅から徒歩約15分

- ◎ JR香椎駅から徒歩約15分
- ◎ 天神方面からの地下鉄利用は、貝塚駅で西鉄貝塚線乗換え西鉄香椎駅下車 徒歩約12分、西鉄香椎花園前駅下車徒歩約10分
- ◎ 西鉄バス「天神郵便局前」乗車、「福岡女子大前」下車（天神から約15分【都市高速経由】：下表参照）

系統番号	始発・経由 (所要時間)	行先
21A	天神郵便局前 (都市高速経由) (15分)	雁の巣レクリエーションセンター、志賀島小学校前
26A	天神郵便局前 (都市高速経由) (15分)	赤間営業所、新宮中央駅東IKEA、新宮・緑ヶ浜、津屋崎
21	天神郵便局前 (33分)	雁の巣レクリエーションセンター、志賀島小学校前
23	西公園 天神郵便局前 (33分)	新宮・緑ヶ浜、高美台一丁目、香椎花園、西鉄三苦駅、大蔵 (下原行は福岡女子大前に停車しないので注意)
26	天神郵便局前 (33分)	赤間営業所、新宮・緑ヶ浜

【注意】 JR香椎駅には停車しない特急列車もあるので注意してください。

福岡女子大学 キャンパス・マップ



- ① 地域連携センター1・2階（会場その1：総会、シンポジウム、研究発表会場）
- ② 新研究棟1階（会場その2：受付、研究発表会場、会員控室、図書展示）

懇親会場

ホテル ザ・ルイガンズ（〒811-0321 福岡市東区西戸崎 18-25 / TEL 092-603-2525）
<http://www.luigans.com/>

懇親会場へのアクセス

学会会場からホテルの送迎バス（無料）によりご案内します。終了後、福岡女子大学、博多駅、天神の3方面にお送りいたします。

学内カフェ「Nanの木」のご案内

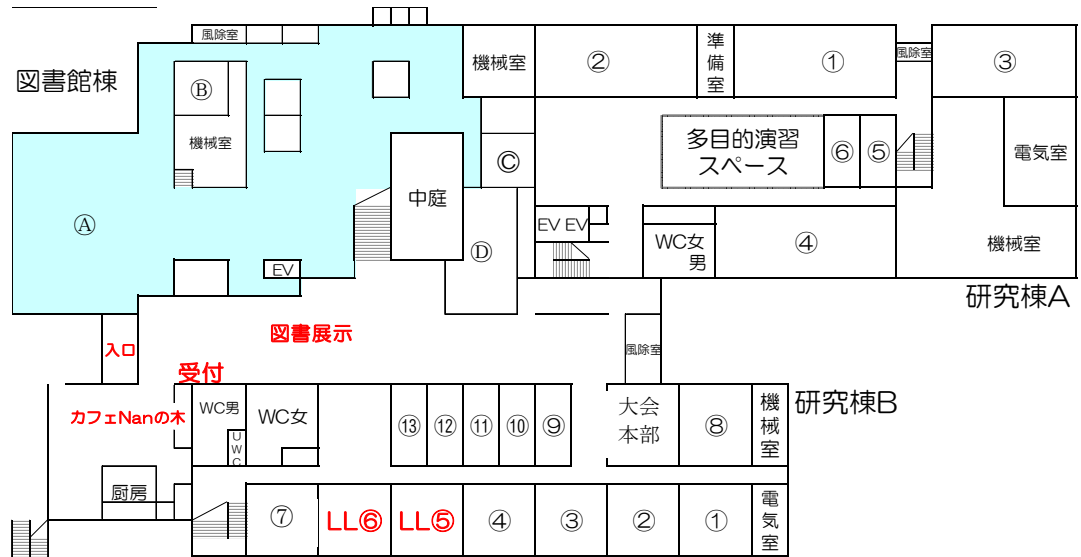
日曜日の昼食（750円）は、事前の予約にてご用意いたします。
（午後の特別講演を聴講される方は、時間的に予約される方が便利です。）

車での来学はお控えください。キャンパス再整備のため、駐車スペースがほとんどありません。

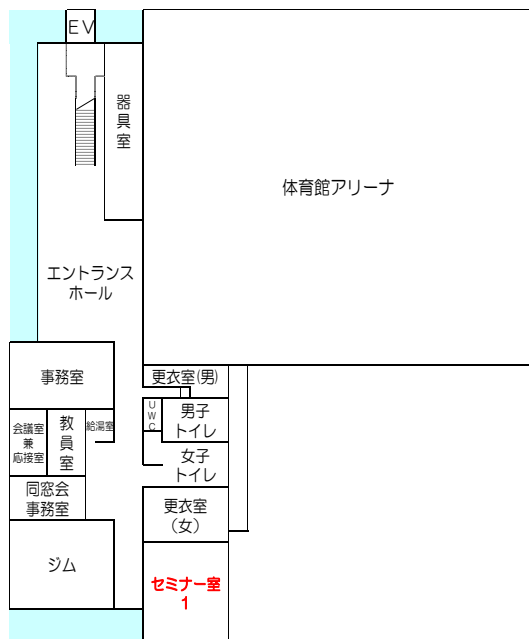
会場案内

福岡女子大学 新研究棟・地域連携センター
 (〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1丁目1-1)

新研究棟 (受付、図書展示、研究発表会場)

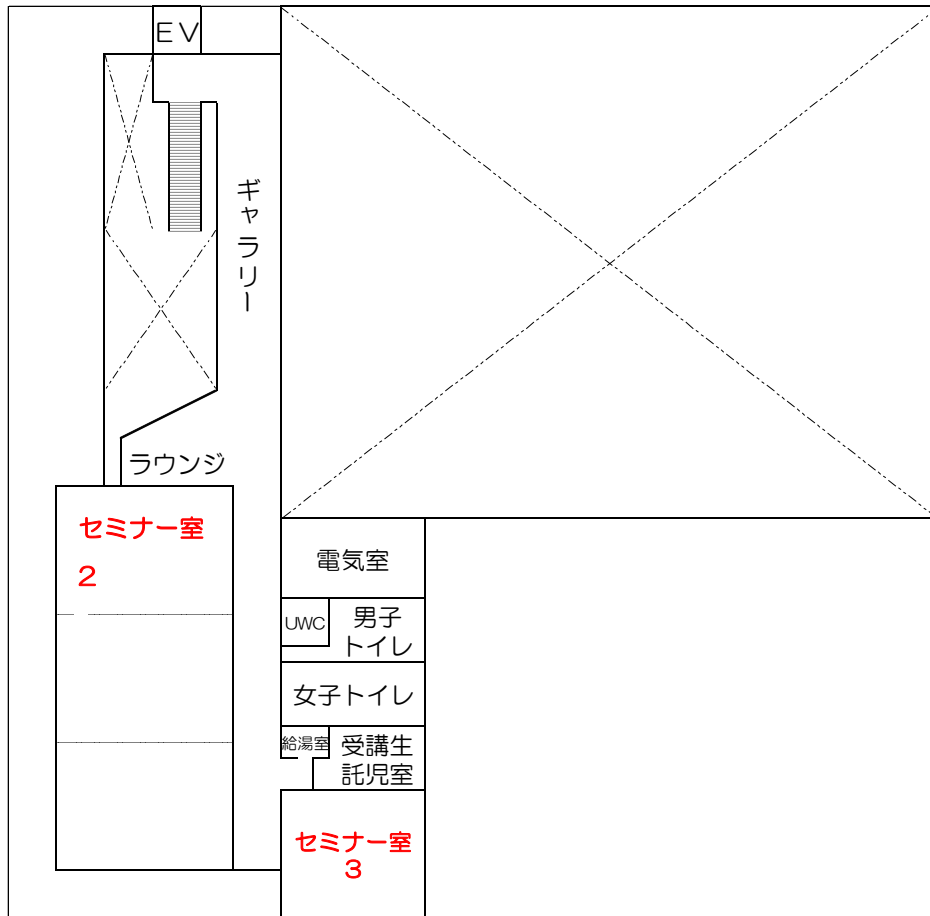


地域連携センター1階 (シンポジウム、研究発表会場)



1階 (セミナー室1は、要スリッパ履き替え)

地域連携センター2階（総会、シンポジウム、研究発表会場）



2階（セミナー室2・3は土足のまま入室可）

大会日程

10月25日(土)

開会式 (13時00分)

地域連携センター 第2セミナールーム

シンポジウム (14時00分～17時00分)

第1部門 (イギリス文学)

地域連携センター第2セミナールーム

第2部門 (アメリカ文学)

地域連携センター第3セミナールーム

第3部門 (英語学)

地域連携センター第1セミナールーム

懇親会 (18時30分～20時30分) (会費 6,000円 学生 4,000円)

【場所 ホテル ザ・ルイガンズ、グランドビーチの間】

10月26日(日)

研究発表 (①9時30分 ②10時10分 ③10時50分 ④11時30分 ⑤12時10分)

第1室 (イギリス文学)

地域連携センター第2セミナールーム

第2室 (イギリス文学)

新研究棟 LL5 教室

第3室 (イギリス文学)

新研究棟 LL6 教室

第4室 (アメリカ文学)

地域連携センター第3セミナールーム

第5室 (英語学)

地域連携センター第1セミナールーム

特別講演 (14時00分)

地域連携センター第2セミナールーム

閉会式 (15時30分)

地域連携センター第2セミナールーム

受付

新研究棟 1階ホール

研究発表者・司会者・シンポジウム講師・会員控室

カフェ Nan の木

書籍展示会場

新研究棟 1階ホール

大会本部

新研究棟非常勤講師控室(B101)

日本英文学会九州支部第 67 回大会プログラム

日 時：2014 年 10 月 25 日（土）・26 日（日）

場 所：福岡女子大学

第 1 日 10 月 25 日（土）

（受付は正午より新研究棟 1 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時 00 分より（地域連携センター第 2 セミナールーム）

	司会・九州大学教授	鵜飼信光
開会の辞	支部長・熊本県立大学教授	村里好俊
開催校挨拶	福岡女子大学副学長	向井 毅
開催校案内	福岡女子大学教授	徳永紀美子
事務局報告	事務局長・熊本県立大学准教授	難波美和子
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・九州大学教授	大橋 浩

シンポジウム（14 時 00 分～17 時 00 分）

第 1 部門「イギリス文学」（地域連携センター第 2 セミナールーム）

可視／不可視の劇場——イギリス演劇と視覚性

司会・講師	鹿児島国際大学大学教授	小林潤司
講師	鳴門教育大学准教授	杉浦裕子
講師	福岡女子大学非常勤講師	石田由希
講師	演出家	山田恵理香

第 2 部門「アメリカ文学」（地域連携センター第 3 セミナールーム）

アメリカ文学と結婚

司会・講師	九州大学准教授	高野泰志
講師	立教大学教授	舌津智之
講師	福岡大学准教授	高橋美知子

第 3 部門「英語学」（地域連携センター第 1 セミナールーム）

動詞句の統語構造

司会・講師	西南学院大学教授	藤本滋之
講師	宮崎公立大学教授	福田 稔
講師	名桜大学教授	中村浩一郎

懇親会（18 時 30 分～20 時 30 分）

場所 ホテル ザ・ルイガンズ

（会費 6,000 円 学生 4,000 円）

〒811-0321 福岡市東区西戸崎 18-25 / TEL 092-603-2525)

【懇親会場へのアクセス 学会会場（福岡女子大学）からホテルの送迎バス（無料）によりご案内します。終了後、福岡女子大学、博多駅、天神の 3 方面にお送りいたします。】

第2日 10月26日(日)

(受付は9時20分より新研究棟1階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (①9時30分 ②10時10分 ③10時50分 ④11時30分 ⑤12時10分)

第1室 (地域連携センター第2セミナールーム)

- 司会 九州大学教授 太田一昭
1. 運命に抗う個人——『タンバレイン大王』にみる君主像
熊本県立大学大学院博士後期課程 山田佳子
-
2. 上下の図像にみるグロテスクな生死の循環—Roovere, Shakespeare, Middleton—
九州国際大学法学部助教 國崎 倫
-
- 司会 北九州市立大学教授 木原謙一
3. *Paradise Lost* における知の探求と自由
熊本県立大学大学院博士後期課程 勝野由美子
-
- 司会 福岡大学教授 山内正一
4. 編集される『ドン・ジュアン』——テキスト編集にみる読書の可変性
津山工業高等専門学校講師 山口裕美
5. スウィンバーンの後期作品を読む——海辺と境界
(招待発表) 九州工業大学教授 虹林 慶
-

第2室 (新研究棟 LL5 教室)

- 司会 活水女子大学教授 井石哲也
1. 吸血鬼物語におけるセクシュアリティと秘密——『ドラキュラ』を中心に
九州大学大学院博士後期課程 浅田えり佳
2. ジョージ・A・パーミンガムとジョージ・パーナード・ショー
——ふたつの演劇作品を通して見る影響関係
別府大学短期大学部教授 八幡雅彦
-
- 司会 九州大学教授 鵜飼信光
メディアム
3. Charles Dickens “The Signalman”におけるメディアと霊媒——幽霊と電気のジャンクション
北九州市立大学大学院博士後期課程 原田 昂
4. 「外から来た人」と帝国のディスコース——*Middlemarch* で背後に隠れているもの
西南学院大学言語教育センター助教 濱 奈々恵
-
- 司会 福岡女子大学准教授 宮川美佐子
5. 恐怖のエージェントとしてのプロフェサー——*The Secret Agent* にみるロシア革命前夜の
「怪物/怪物性」
北九州市立大学大学院博士後期課程 今川京子

第3室 (新研究棟 LL6 教室)

- 司会 熊本県立大学准教授 難波美和子
1. トールキンの『シルマリルの物語』におけるトマス・アキナス受容
九州大学大学院博士後期課程 島居住佳江

- 司会 熊本県立大学准教授 水尾文子
2. 生のヴィジョンを伝えるイメージ——『波』におけるパーシヴァルの存在意義
九州大学大学院博士後期課程 渡邊裕子

3. Virginia Woolf, *Orlando* における Orlando の両極的性質の循環性
九州大学大学院博士後期課程 田中恵理

- 司会 山口大学教授 宮原一成
4. Peter Ackroyd による幻惑——*Dan Leno and the Limehouse Golem* において
熊本県立大学大学院博士前期課程 濱崎建至

5. 記憶と死——カズオ・イシグロの *Never Let Me Go*
九州大学大学院博士後期課程 阿部卓郎

第4室 (地域連携センター第3 セミナールーム)

- 司会 佐賀大学教授 早瀬博範
1. *Shadows on the Rock* における理想郷の創造
九州産業大学准教授 志水智子

2. ホールデンとダック——*The Catcher in the Rye* と “I’m crazy”
熊本県立大学大学院博士前期課程 鳥養志乃

- 司会 九州大学教授 高橋 勤
3. 「父」のいない世界——『誰がために鐘は鳴る』におけるヘミングウェイの父性観
九州大学大学院博士後期課程 日下幸織

- 司会 熊本県立大学准教授 坂井 隆
4. 指先の詩学——*The Glass Menagerie* における劇化・演出の戦略
九州大学大学院博士後期課程 幸山智子

- 司会 九州大学教授 小谷耕二
5. アメリカン・ルネサンスにおける身体と機械—アフォーダンス表象を中心に
(招待発表) 鹿児島大学教授 竹内勝徳

第5室 (地域連携センター第1 セミナールーム)

1. 【発表なし】

- 司会 熊本大学教授 登田龍彦
2. DP の定性制限とその獲得について

九州大学専門研究員 團迫雅彦

3. 三部門並列モデルに基づく省略現象への一般的アプローチ——文断片から VP 削除へ

九州大学大学院博士後期課程 永次健人

4. 17 世紀『狐物語』の受容—イリノイ大学図書館所蔵コピーの謎

司会 熊本大学教授 隈元貞広
福岡女子大学大学院博士後期課程 都地沙央里
福岡女子大学教授 向井 毅

5. 調整と手続き的制約——関連性理論からみた after all と「だって」

司会 九州大学教授 大橋 浩
(招待発表) 九州大学准教授 大津隆広

特別講演 14 時 00 分より (地域連携センター第 2 セミナールーム)

司会 福岡女学院大学大学院教授 吉田徹夫

青山学院大学教授 富山太佳夫
「お化けの行列」

閉会式 15 時 30 分より (地域連携センター第 2 セミナールーム)

挨拶

福岡女子大学准教授 宮川美佐子

〈第1日〉10月25日（土）

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」（地域連携センター第2セミナールーム）

可視／不可視の劇場——イギリス演劇と視覚性

司会・講師	鹿児島国際大学教授	小林潤司
講師	鳴門教育大学准教授	杉浦裕子
講師	福岡女子大学非常勤講師	石田由希
講師	演出家	山田恵理香

『真夏の夜の夢』のアテネの公爵は職人たちの素人芝居を所望して "I will hear that play" と言う。今日、私たちにとって演劇は「見に」行くものだが、シェイクスピアの時代には「聞く」ものだったようだ。演劇における聴覚性（aurality）に対する視覚性（visuality）の優位が近代に入って高まったことを示す証拠としてよく引かれる一節だが、演劇における視覚的な要素と聴覚的な要素は、単純な対立概念として理解することが常に適切であるわけではない。劇場という空間において観客の「見る」という経験は、フィジカルな視覚のメカニズムを通してのみ形成されるわけではなく、目には見えないものごとが、せりふが喚起するイマジネーションの働きによって心の目にまざまざと「見え」たり、舞台上に確かに存在するものが「見えない」ものとしてやりすごされたりすることもしばしばだからである。本シンポジウムでは、見えることと見えないこととを隔てる不確かな境界線上で初期近代から現代までの演劇が何をどのように成し遂げてきたのかをめぐって、さまざまな角度から討議したい。

視ることをめぐる悲劇としての『ジュリアス・シーザー』

小林潤司

「ああ、憎むべき誤解よ、憂鬱の落とし子よ、おまえはなぜ信じやすい人の心につけこんでもせぬものを見せるのだ？」は、従僕の単純な見間違いから戦況の判断を誤り死を選んだキャシアスを悼む友人のせりふだが、少し極端な言い方をすれば、シェイクスピアの悲劇『ジュリアス・シーザー』の世界は、もっぱら「信じやすい人の心」が「ありもせぬもの」を見せられることによって惹起される致命的な過誤の連鎖から構成されている。一方、劇場とは、まさに「信じやすい人の心」に「ありもせぬもの」を見せるための装置であり、とりわけエリザベス時代の劇場は、「ありもせぬもの」を観客に幻視させる技巧に長けていた。視ることをめぐる悲劇としての『ジュリアス・シーザー』が、当時の劇場で上演された時にどのような効果を発揮し得たかという観点から、このドラマを読み直してみたい。

私設劇場の観客の眼に映った『輝けるすりこぎ団の騎士』

杉浦裕子

2014年1月、ロンドンのShakespeare's Globeと同じ敷地内に新たに室内劇場The Sam Wannamaker Playhouseがオープンした。少年劇団が拠点としたいいわゆる私設劇場(private theatre)の再現である。もちろん現代の上演では、役者はみな成人俳優であり、観客層も紳士階級が主を占めた当時とは違うが、それでも蝋燭の灯りに照らされた幻想的な劇場空間の再現は、当時の観客の眼に映ったであろうものについて、新たな視座を与えてくれる。

本発表では、ブラック・フライヤーズ少年劇団(Children of Blackfriars)によって上演された、フランシス・ボーモント(Francis Beaumont, ?1585-1616)作『輝けるすりこぎ団の騎士』(*The Knight of the Burning Pestle*, 1607)を題材に、この劇が当時の私設劇場の観客に何を<可視化>させる劇であったのかを探る。いわゆる“舞台上の観客”である市民夫妻がしゃしゃり出て、少年劇団演じる劇をハイジャックしていくという構造をもつ本作の背景には、市民階級の台頭と紳士階級が抱いた危機感がある。当時の観客の眼に何が映ったのかという問題は、この背景をおさえた上で、役者(少年俳優)、観客(舞台上の観客と舞台下の観客の関係性を含む)、そして劇場空間(空間が醸し出す親密性)の3点を可能な限り具体的に考慮したときに、少しずつ明かされていくであろう。

なぜ、エア・リンチか?——『クレンジド』における人物の隠し方

石田由希

ことに人や物の見せ方に関して、サラ・ケイン(Sarah Kane, 1971-1999)は、極端な劇作家だ。彼女が遺した5つの戯曲を並べてみると、それらが時系列に沿って、〈見せる演劇〉から〈物語る演劇〉へと変化していることが判る。始めの二作品は、90年代挑発演劇(In-Yer-Face Theatre)の典型と見做されており、舞台上で忌避されがちな行為やモチーフをそのまま提示することで、観客と劇評家の度肝を抜いた。他方、最後の二作品では、視覚的なイメージが影を潜め、すべては豊かな語りのうちに収められている。

このような作品史において、3つ目の戯曲『クレンジド』(*Cleansed*, 1998)は、どのように位置づけられるのだろうか。確かに本作は、身体的苦痛や幻覚をめぐる情景を数多く展開しているため、前期の〈見せる演劇〉に分類されることが多い。ただ、前二作品とは異なり、この劇は、舞台上に存在する一部の登場人物を透明化するという独特の設定を含んでいる。例えば集団暴行の場面では、加害者である「見えない男たち(unseen group of men)」が、その姿を完全に消されており、苦悶する被害者、殴打の音、加害者の罵声によって、パントマイムめいたエア・リンチ(air lynching)が繰り広げられる。本発表では、サラ・ケイン演劇全体と同時代の類似作品とを参照しながら、『クレンジド』における人物の不可視化について考えてみたい。

闇をみせる、闇の中にみる——現代の祝祭劇における視覚効果と演出法

山田恵理香

「街を劇場に！」をコンセプトに、廃墟や公園、空き店舗などのスペースをみつけ

ては劇場として利用してきました。本来は劇場ではない空間を劇場とすることで、その空間のもつ祝祭性が演出に大きく影響を与えます。それは私のライフワークともいえる「祝祭劇シリーズ～みえないものと出会い、きこえない音を聴く～」の演出へと繋がっています。野外上演では日が落ちゆく夕闇の中で開演し、月明かりの中で終演をむかえるような、自然光を利用した作品創作を行ってきました。また、屋内の上演においてはいわゆる「暗転」ではなく、スタッフ泣かせの「漆黒の闇」を作り出すことにこだわってきました。闇をつくることでよりつよく光をみせたり、目を凝らしてみることを強いて観客のイマジネーションを刺激したりする効果のために闇を利用してきました。野外舞台に松明の明かりで処刑台を出現させた『悪魔を呼び出す遍歴学生』（ハンス・ザックス作）、小部屋ごとの照明と無数のシルエットで幻影をつくりだした『ARASHI』（シェイクスピア作）、陰と視線と音で観客と共に降霊会を行った『窓ガラスに刻まれた文字』（W.B.イエイツ作）、闇の中で作品の半分を上演した『アオイトリ青い鳥アオイ...』（メーテルリンク『青い鳥』原作）など2005年～2013年の作品を中心に、祝祭劇における暗闇の効果、視覚表現や演出方法を振り返ります。

第2部門「アメリカ文学」（地域連携センター第3セミナールーム）

アメリカ文学と結婚

司会・講師 九州大学准教授 高野 泰志

講師 立教大学教授 舌津 智之

講師 福岡大学准教授 高橋美知子

アメリカ文学においてこれまで結婚というテーマはそれほど広く研究されてきたとは言えない。かつてレスリー・フィードラーがアメリカ文学は大人の成熟した恋愛を描くのを不得意としてきたと看破したように、結婚が小説の主要テーマとして深く掘り下げられることは少なかった。流動的な社会の中で「自由」の国を標榜し、「経験と成熟」より「若さと無垢」を重視するアメリカの伝統において、結婚はリップ・ヴァン・ウィンクル以来、無垢や自由を奪うものと忌避されてきたのである。しかしかたに忌避されようとも、結婚という社会制度自体は常に存在していたのであり、アメリカ小説は結婚を描き続けてきた。本シンポジウムは無数に描かれながらも研究の対象とされてこなかった結婚のモチーフにジェンダーや人種、宗教といった観点から切り込むことで、アメリカ文学に新たな光を当ててみることを試みる。

異端審問と生物学的畏——ヘミングウェイの結婚観

高野泰志

結婚を忌避したり、不幸な結婚生活を送ったりする主人公が数多く描かれることから明らかなように、生涯で4度も結婚しながらもヘミングウェイは常に結婚を否定的に描き続けた作家である。ヘミングウェイは1927年に最初の離婚と再婚をし、再婚相手の宗派に合わせてカトリックに改宗しているが、その結果、最初の結婚は「教会外」のものとして無効とされた。結婚をめぐるそのような大きな変化が起こった直後に書かれた『武器よさらば』には、ヘミングウェイの結婚制度に対する意識がきわめて

強く反映されている。"There's no way to be married except by church or state"と言いながらも"We are married privately"と考える二人の「事実婚」は、「異端審問」になぞらえられる帝王切開手術の結果、キャサリンの死という悲劇的結末を迎えるのである。本発表はカトリック改宗と、妊娠・出産という「生物学的罨」とが、ヘミングウェイの結婚観にいかなる影響を及ぼしたかを検討する。

結婚と人種——フィッツジェラルドの人種意識／描写をめぐって

高橋美知子

スコット・フィッツジェラルドと妻ゼルダのトラブルに満ちた結婚生活はあまりに有名だが、それを反映するように、彼の長編と短編どちらにも、気苦労やストレス、欺瞞に満ちた夫婦関係があふれている。フィッツジェラルドの作品における結婚はしばしば男女の経済格差(階級)の観点から分析されるが、本発表では彼の描く結婚を読み解くアメリカ的キーワードとして、「人種」を提示したい。友人ジョン・オハラに宛てた手紙で、フィッツジェラルドは両親のルーツに言及し、“I am half black Irish and half old American stock with the usual exaggerated ancestral pretensions.”と述べている。彼の中にあった二つの人種のせめぎあいを映し出すかのように、『夜はやさし』では白い肌と浅黒い肌の対比が結婚を軸に展開される。本作を中心に、フィッツジェラルドの描く結婚を人種という視点から考察してみたい。

結婚と友愛——ウィラ・キャザーの親密圏

舌津智之

異性愛の規範に懐疑的なキャザーは、その作品中、不幸な夫婦を数限りなく描いているが、彼女の出世作である『おお、開拓者よ!』のヒロインは、「友人同士が結婚すれば、安全ね」と語り、幼なじみの男性と40代にして結ばれる。この友愛結婚は、妥協的・保守的なアンチクライマックスにみえる一方で、ヒロインが親しくする風変わりな老人と若い女中との同居を前提としている点、新しく脱家族的な結婚観を示すようにも思われる。伝記的にみると、キャザーは、『おお、開拓者よ!』を出版する前年の1912年から、イーディス・ルイスとの安定的な同居生活を始めているが、その後も、以前から親しかったイザベル・マクラングとの親密な関係は続き、二人で長い旅行に出かけることもあった。本発表では、キャザーの人生と作品が、一対一の恋愛関係を強制する対幻想に抗い、イデオロギーとしての結婚・家族制度を相対化しつつ、複数形の友愛関係を許容する親密圏の構築を目指したものであることを検証したい。

第3部門「英語学」(地域連携センター第1セミナールーム)

動詞句の統語構造

司会・講師 西南学院大学教授 藤本滋之
講師 宮崎公立大学教授 福田 稔
講師 名桜大学教授 中村浩一郎

動詞句は、Larson (1988)が複数の argument を収容する構造を提案して以来、VP-shell (Hale and Keyser 1993)として採用されてきた。他方、adjunct を伴う構造については、ミニマリストの枠組みで wh 句の抜き出しに関する研究は進んだ(cf. Müller 2011, Boeckx 2012)ものの、文中で adjunct が生じる位置についての研究は、意味に着目した Truswell (2010)や、vP 内外の違いに注目した Narita (2011)によって始まったばかりと言ってよい。さらに、動詞句内には、Topic phrase や Focus phrase といった情報構造にかかわる機能範疇が存在する可能性(cf. Belletti 2004)や、目的語の格を照合し動詞句の語彙的アスペクト特性を反映する機能範疇の存在も考えられる(cf. Travis 2010)。このシンポジウムでは、動詞句の構造に焦点を当て、その基本構造を形成する原理、機能範疇を含む可能性、adjunct を伴う場合の構造について考察する。

vP 内部のトピック・フォーカス構造について

中村浩一郎

本発表では、主に日本語の動詞句(vP)内部のトピック・フォーカス構造について分析する。左端部(left periphery)に関しては、Rizzi (1997)以来 Topic Phrase (TopicP)、Focus Phrase (FocP)を想定する必要があることが研究されている。それに対し、動詞句内部のトピック・フォーカス構造は、Belletti(2004)などを除き、さほど研究されていない。そこで、本発表では、主に以下の3つの統語的な証拠に基づき、vP 内にも TopP、FocP が存在することを示す。

- (1) 否定辞と数量詞との相対的作用域
- (2) 副詞の種類 (CP 副詞、TP 副詞、VP 副詞) と統語要素の生起する位置との相関関係
- (3) 二重目的語構文の数量詞の作用域の相関関係

以下の例を見てみよう。

- (4) a. こっそり太郎は (本ではなく) 雑誌を読んだ。
- b. こっそり太郎は (本ではなく) 雑誌は読んだ。

(4b)では、目的語が「は」でマークされており、フォーカスを示す。更に、VP 副詞「こっそり」よりも構造的に下の位置にあることにより、vP 内部に生起していると言える。

本発表の理論的帰結は、vP 内部に左端部と類似した構造を想定することにより、CP と vP の平行性が捉えられる、ということである。

抜き出しを許す付加詞について

福田 稔

一般に付加詞からの移動は許されないという事実 (例えば(1)) は、付加詞の構造位置やスペルアウト (またはトランスファー) の適用段階に着目して説明されてきた (Boeckx (2012)を参照)。

- (1) *Who did Mary cry [after John hit t]?

しかし、Truswell (2010)は抜き出しを許す以下の3種類の付加詞の事例は意味的条件 Single Event Condition で説明すべきであると論じている。

- (2) What did you come round [to work on t]?
- (3) What did John drive Mary crazy [whistling t]?

(4) *Which book did John design his garden [after reading t]?*

これに対して、Narita (2011)は付加詞からの抜き出しの可否は、究極的には付加詞が *v* (または *v**) より上位にあるか・下位にあるかという構造位置に起因すると論じている。しかし、全ての事例を扱っていない。本発表では抜き出しを許す付加詞の構造位置と特性を検証し、派生理論の観点から説明を試みる。

主要参考文献

Narita, H. (2011) *Phasing in Full Interpretation*, Doctoral dissertation, Harvard University.
Truswell, R. (2010) *Events, Phrases, and Questions*, Oxford University Press.

主題階層、VP-shell、Split VP と諸構文の派生

藤本滋之

VPの基底構造すなわちVPの項がMergeする順序は、主題階層(Agent > Location > Theme)に従うと考えられる(加賀2001、Kaga 2007)。これはUTAH (Baker 1988)を具現化したものであり、三つの主題役をすべて有する文の場合、VPの規定構造は次のようなVP-shellになる。

(1) [_{VP} Agent [_{V'} V [_{VP} Location [_{V'} V Theme]]]]

他方、目的格を照合する仕組みは、VP-shellの二つのVPの間に語彙的アスペクトを反映する機能範疇(inner) Aspect Phraseを仮定することで、合理的な説明が可能になった(Travis 2010)。これは、Koizumi (1995)で提案されたsplit VPを具現化したものであり、これを組み込むと上記(1)は次のような構造になる。

(2) [_{VP} Agent [_{V'} V [_{AspP} Spec [_{Asp'} Asp [_{VP} Location [_{V'} V Theme]]]]]]

この発表では、上記(2)の構造を仮定し、場所格交替構文、与格交替構文、結果構文、場所格倒置構文、There構文の派生のメカニズムを考察する。交替関係にある構文の目的語の選択はaffectednessによって決まるという主張(Kaga 2007)が、(2)により構造的に裏付けられることになる。

<第2日>10月26日(日)
研究発表

第1室(地域連携センター第2セミナールーム)

司会 九州大学教授 太田一昭

1. 運命に抗う個人——『タンバレイン大王』にみる君主像

熊本県立大学博士後期課程 山田佳子

ソフォクレスの『オイディプス王』にみられるように、古来より自らに定められた運命から逃れようともがく人間の姿は描かれ続けてきた。クリストファー・マーロウ(1564 - 1593)の『タンバレイン大王』(1587 - 88)において、羊飼いかからトルコ皇帝の座にまでのぼりつめる程の野心を持ったタンバレインの枠を定める予言はないものの、運命に挑むタンバレインの姿が繰り返し描かれる。本作品は、『フォースタス博士』の

序文にも登場するイカロスのように、天にまで上昇したがゆえに下降したタンバレインの死で幕を閉じる。

本発表では、これまでイカロスになぞらえられて論じられていたタンバレイン自身の悲劇的な死に加えて、親から子へと継承される王位に焦点を当てて考察していきたい。

2. 上下の図像にみるグロテスクな生死の循環—Roovere, Shakespeare, Middleton

九州国際大学助教 國崎 倫

〈さかさま世界〉^{ブロードシート} 瓦版は、現存秩序の転覆を空想する民衆のイメージの形態をとりながら、人間による動物搾取の過程をさかさまに描いたアディナータ（ありえないこと）も含む。

ローヴェレ (Anthonis de Roovere) の詩、“Vander Mollenfeeste”において、モグラは土中で宴を催し、人間を喰う。肉を失う招待客の痛みや悲哀は語られない。これは、喰われた肉が土へと還り、豊穡、新生へと循環することで生命の繁茂へ貢献すると期待されるからであり、死への恐怖は完全に排除される。このアディナータは、モグラ塚から巣穴への垂直落下という上下の図像を、生命を屠りつつも新しく産み出す有機体として表象することにより、墓と胎、葬儀と祝祭の境界を曖昧とする。

同様の理念が『ハムレット』(1600) や、ミドルトン (Thomas Middleton) 作『チェスゲーム』(1624) にみられる。生と死の循環を視覚化するために、無価値で小規模、不浄や醜悪という予想外の対象を礼賛する修辭的パラドックスは、^{エビディクシス} 技倆誇示として作品に込められる。本発表は、三作品に共通する上下の図像を指摘しながら、その差異についても考察したい。

司会 北九州市立大学教授 木原謙一

3. *Paradise Lost* における知の探求と自由

熊本県立大学大学院博士後期課程 勝野由美子

Milton の *Paradise Lost* (1667; 1674)において、知識は重要なテーマの一つである。神からの唯一の禁制は知識の樹の実を禁じたものであり、天使 Raphael との対話も、天使 Michael による Adam の教育も知識の獲得に関わるものであり、何より禁断の果実を食べる直前には Adam も Eve も ‘knowledge’ という語を口にす。また、Raphael との対話の最後に Adam と Eve は、人間に自由が与えられていることを忠告される。様々な知識を深めていく Adam は自由な存在としての自己をどのように認識しているのか。

本発表では、知の探求について Adam が身につけた知識は墮落にどのような影響を与えたか、知識欲はどのように変化していくか、Eve にとって知識とはどのようなものかを考察し、知識の深まりが自己認識および自由に関する認識にどのように影響し、どのような意味があるのかを明らかにしたい。

司会 福岡大学教授 山内正一

4. 編集される『ドン・ジュアン』——テキスト編集にみる読書の可変性

文学史上の作品は、後世に編集される場合が多い。現代に近づくほどに、作者の手記や書簡などが編集され、作品の編者は、その影響を受けながら作品を編集する。バイロンの『ドン・ジュアン』の場合、現代の読者は編者により構成された一冊の書物として作品と出会う。もしくは、ウェブサイトからテキストを一度に入手する。しかし、本作品は現存するすべての詩行が一度に発表されたわけではない。また発表当初には続編が計画されておらず、詩人と出版事情、読者と作者の相互関係などの事柄が絡み合い、テキストが成立した。当時の読者は、その出版状況に応じて作品を受容した。よって現代の読者は、作品発表当時の読者と全く異なる作品受容をしているにちがいない。

本論は編集されたテキストが、読者の読みに対していかなる影響を与え、作品理解のあり方を誘導しえるのかに焦点をあてる。1819年に発表された『ドン・ジュアン』第1、2巻部分の構成を中心に、複数の編集本を比較することで、編集意図の相違点や類似点もしくは編集された意図を考察する。

5. スウィンバーンの後期作品を読む——海辺と境界

九州工業大学教授 虹林 慶

アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン(1837-1909)の詩人としての評価は、多くの場合、スキャンダラスな面のみが注目されがちな前期作品『カリドンのアタランタ』(*Atalanta in Calydon*, 1865)や『詩とバラード』(*Poems and Ballads*, 1866)などに拠っていることが多い。従って、現在に至るまでその官能性と過激性が定評となっている。その一方、スウィンバーンの後期作品についての評価はいまだ定まっていない。本発表では、後期作品の中から、特に重要とされる海や海辺の風景を描いた詩を中心に選び、そこで展開される詩的ヴィジョンを分析する。前期作品との違いを踏まえつつ、その特徴を特に思想面において考察したい。最終的には、反逆者たるスウィンバーンがイギリス詩の伝統においてどう捉えることができるかを考え、ヴィクトリア朝詩人としての重要性を再認識したい。

第 2 室 (新研究棟 LL5 教室)

司会 活水女子大学教授 井石哲也

1. 吸血鬼物語におけるセクシュアリティと秘密——『ドラキュラ』を中心に

九州大学大学院博士後期課程 浅田えり佳

『ドラキュラ』および他の吸血鬼を題材とした物語において、性行為をしばしば象徴する吸血とセクシュアリティとの関連は非常に重要である。基本的に吸血は異性間のみで行われ、同性間の吸血行為には同性愛とのリンクが示唆される。また、吸血に際して同性間での秘密の共有がなされている点にも着目すべきである。ミナはルーシーが何らかの被害にあっていることに気づきつつも、それを自分の日記というきわめて閉ざされた場で語る。吸血行為及びその痕跡を目撃するのは被害者と同性の人物であって同時に両性によって目撃されることはなく、その目撃談は直接の語りではなく

記録というフィルターを通して異性に伝えられる。そして例外的に異性に吸血の現場を目撃された被害者たちはその後精神的に性別が転換したような特殊な状況に陥るのである。ストーリーと同じくアイルランド人であるレ・ファニュの『カーミラ』も女性同士の吸血行為という点で考察に値する。本発表では『ドラキュラ』を中心に 19 世紀の吸血鬼物語について、セクシュアリティの混乱と秘密の共有という観点から論じる。

2. ジョージ・A・バーミンガムとジョージ・バーナード・ショー ——ふたつの演劇作品を通して見る影響関係

別府大学短期大学部教授 八幡雅彦

北アイルランド出身の小説家ジョージ・A・バーミンガム George A. Birmingham (1865-1950)は今日ではあまり取り上げられることのない作家である。しかし彼の演劇『ジョン・リーガン将軍』*General John Regan* (1913)が、この作品の舞台となったアイルランドのウェストポートで上演された時、20人以上の逮捕者がでるアイルランド演劇史上最悪の暴動が起きた。彼のこの作品を絶賛した作家にジョージ・バーナード・ショー George Bernard Shaw (1856-1950)がいた。ショーの『ジョン・ブルのもう一つの島』*John Bull's Other Island* (1907)もまた多くの物議をかもした演劇だった。バーミンガムもショーも先祖はイギリス出身のプロテスタントだった。本発表では、ショーがバーミンガムに宛てた手紙をもとに、この二つの演劇を比較検討しながら、バーミンガムとショーの経歴に触れながら、『ジョン・リーガン将軍』の真のテーマは何か、そしてこの作品の持つ普遍的意義は何かを論じる。そして今日ではあまり読まれることのないバーミンガムの価値を示したい。

司会 九州大学教授 鶴飼信光
メディアム

3. Charles Dickens “The Signalman”におけるメディアと霊媒——幽霊と電気のジャンクション

北九州市立大学大学院博士後期課程 原田 昂

Charles Dickens が 1866 年のクリスマス・ストーリーとして発表した短篇小説“The Signalman”は、*Mugby Junction* という作品集に収録された。ジャンクションとは、複数の線路が集まる場所であるだけでなく、そのために新たな交流を生む場でもある。Dickens が“The Signalman”で描くのは、幽霊と電気の交流を生む、19 世紀のジャンクション性だ。本作品において幽霊を媒介するのは電信である。電信は、1840 年代に鉄道ネットワークに沿って瞬く間に建設されると、すぐに奇談の絶えないメディアとなった。語源を同じくするメディアと霊媒が、再び一致したものが電信なのだ。また動物身体においても、神経の中を通るとされていた精気 (spirit) が、この時代に電気だと考えられるようになった。本発表は、この 19 世紀的ジャンクションへの意識から、Dickens をメディア時代の作家として位置づける。

4. 「外から来た人」と帝国のディスコース——*Middlemarch* で背後に隠れているもの

西南学院大学言語教育センター助教 濱 奈々恵

George Eliot は幼少期を過ごした 1820 年代から 30 年代を作品の舞台に選ぶことが多かった。彼女が残した 13 作品のうち 6 作品がこの時代設定であり、このうち 3 作品で田舎生活を、2 作品で選挙法改正前後の社会を、そして残る 1 作品でイギリス人の目に映る植民地の問題を描いている。

本発表ではこれらの 6 作品から、“Brother Jacob”(1864)、*Felix Holt, the Radical* (1866)、そして *Middlemarch* (1871-2) の 3 作品を使って、George Eliot 作品における帝国意識の問題を明らかにしたい。3 作品ともほぼ同時期を舞台としており、また主人公かそれに近い人物が国外（特に植民地かそれに準ずる土地）と結びつけられている。しかも Eliot はこの「外から来た人」とその取り巻きに帝国意識を付与しており、単なる「帰国者」と「その周辺人物」して位置づけていない。本発表では“Brother Jacob”と *Felix Holt* の研究で述べた帝国意識の問題を概観し、それが *Middlemarch* でどのように描かれているのか述べていく。

司会 福岡女子大学准教授 宮川美佐子

5. 恐怖のエージェントとしてのプロフェサー——*The Secret Agent* にみるロシア革命前夜の「怪物/怪物性」

北九州市立大学大学院博士後期課程 今川京子

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては、伝統的な権力機関がその権威を失い、機能不全に陥った時代である。近代化の矛盾が膨張し限界に達した結果、ロシア革命に代表されるように、その時代の危機意識や不安の表現手段のようにして革命という現象が見られるようになっていった。このような世界内状況を反映させた小説が Joseph Conrad (1857-1924) の *The Secret Agent* (1907) である。

本発表では *The Secret Agent* の主要人物の一人である破壊思想のエージェント、The Professor に注目し、恐怖のエージェントである彼の熱狂的怪物性が、同時に現象としての 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのテロリズムとアナキズムが持つ究極的ナルシズムをヴィジュアル化してみせることを論証する。さらに、恐怖の持つ力に魅せられ、恐怖のエージェントとしての生を追求する Professor のグロテスクな「怪物性」を姿見として、Conrad が同時代のアナキズムとテロリズムのなかに、近づきつつある時代の動乱の特徴を読み取っていたことを示す。

第 3 室 (新研究棟 LL6 教室)

司会 熊本県立大学准教授 難波美和子

1. トールキンの『シルマリルの物語』におけるトマス・アクィナス受容

九州大学大学院博士後期課程 島居佳江

『シルマリルの物語』は、トールキンが母国イギリスに捧げる完全な神話を創造したいと望んで書いた作品である。これは、彼にとってカトリック信者としてのライフワークでもあった。

カトリック信者は、信仰と行いによって救われると信じる。トマス・アクィナスは、徳の考察とは理想的な人間像の考察であるとした。稲垣良典氏はまた、カトリック思

想の根本的意図は共通で、それは超越の思想であると述べる。この超越の思想は、『シルマリルの物語』の全篇を通じて流れている。天地創造から始まる物語の中で、「つくられたもの」には常に墮落がついてまわるが、その一方で偉大な被創造物も現れる。しかし、それは神の存在を意識して初めて偉大であり得るし、永続的ではないのである。本論では、この『シルマリルの物語』の中で渾然と溶け合ったトマス・アクィナスの思想を抽出し、トールキンの神話創造への試みを考察する。

司会 熊本県立大学准教授 水尾文子

2. 生のヴィジョンを伝えるイメージ——『波』におけるパーシヴァルの存在意義

九州大学大学院博士後期課程 渡邊裕子

ヴァージニア・ウルフ『波』(1931)では、個別的な生と、他者と一体となる瞬間の生という、「生」の二側面が描かれ、どちらにも同程度に価値が与えられ、どちらにも絶対的な価値は与えられていない。しかし同時に作品は、通常ならば矛盾する生のこの二つの様相が共存する稀なる理想的な瞬間も描いており、その最たる例は、パーシヴァルの送別会におけるものである。インドとの関連から帝国主義とも結びつけられてきたパーシヴァルの存在は、このように生のあり方とも関係している。本論は、このパーシヴァルの生のあり方との関係が種々のイメージによって伝えられていることに焦点をあてる。物語を形成する6人の男女の語りの中心に位置しながら一言も発しない彼は一種抽象的な存在とも捉えられる。また個でありながら一である瞬間を生み出す彼の働きは、各章の前に挿入された自然描写における太陽のイメージと同一視され、かつその瞬間の重要性は花のイメージによって強調されているのである。本論は、言葉にできない生のヴィジョンを伝えるパーシヴァルというイメージに注目し、その存在意義を新たな視点から明確にすることを目指すものである。

3. Virginia Woolf, *Orlando* における Orlando の両極的性質の循環性

九州大学大学院博士後期課程 田中恵理

Virginia Woolf の *Orlando* (1928) における主人公 Orlando の両性具有性はよく議論されるテーマの一つである。だが、Orlando の両性具有性は、広く認識されているような単なる男性性と女性性の融合ではなく、むしろ両性の共存と循環だと考える。さらに、この Orlando の両極的な性質の循環性は、性に関することだけではなく Orlando の様々な内面的、外面的側面にも現れている。

本発表では、Orlando をめぐる諸々の両極性と循環性を分析し、そうした性質が一貫性の欠如といった否定的な意味合いではなく、あらゆる差異の超越への展望を示唆していることを明らかにする。特に注目すべきは、Orlando の詩“The Oak Tree”との関連性であるが、“The Oak Tree”は、Orlando の中で procreative/creative の両立が果たされたときに詩それ自体が命を得たような形で完成している。このことから、この詩は「出産」と「創作」という非両立的要素の建設的な共存と循環の可能性を示す証となっていると考えられる。Orlando の両極的性質の循環性が物語全体の豊饒性や活力に繋がっていることを論じたい。

4. Peter Ackroyd による幻惑——*Dan Leno and the Limehouse Golem* において

熊本県立大学大学院博士前期課程 濱崎建至

Peter Ackroyd による *Dan Leno and the Limehouse Golem* (1994) は、ヴィクトリア朝後期のロンドン、その貧民街イースト・エンドで起こった悪名高き「切り裂きジャック」の事件を、物語をかたちづくる上での題材として用いている。当時のロンドンは人口増大とともに繁栄をとげる一方で、性に関連した地下文化を形成し、二面的な性格を帯びていた。このような都市を舞台にして、作者は、当時の労働者階級の娯楽施設であったミュージック・ホールのスター、ダン・リーノをはじめとして、カール・マルクス、ジョージ・ギッシング等の歴史上の人物たちを登場させ、自身による虚構の人物と巧妙に組み合わせる物語を描き、さらに様々な文体を駆使する精緻精妙な語りの装置によって物語中の殺人の犯人の特定を不可能にするなど、読者を幻惑させる手法を用いている。

本発表では、作者の用いた複数の語りを、それぞれのもつ特徴から分析し、それらが互いに作用しあい、読者に幻惑の効果をもたらす構造の分析を試みたい。

5. 記憶と死——カズオ・イシグロの *Never Let Me Go*

九州大学大学院博士後期課程 阿部卓郎

イシグロは5歳の時に父親の仕事のため、家族とともに長崎からイギリスへ渡って、帰国することもなく成長している。その後彼は、「自分は何者なのか、何のために存在しているのか」というアイデンティティの問題で苦悩することになる。彼は、自分自身のアイデンティティの問題を各作品の主人公達に投影して、彼らにアイデンティティの揺らぎゆえの苦悩を体験させ、登場人物がいかにして自分の存在証明を得るか、その態様を描いていると思われる。本論では、イシグロの *Never Let Me Go* (2005) を取り上げる。彼の長編6作品の通底するテーマは、彼の不安定なアイデンティティに起因する問題から派生していると考えられる。本作品に登場するクローン人間達の言動を詳細に分析することによって、全6作品の通底するテーマ——アイデンティティの模索と確立——の問題がどのように本作品に織り込まれているかを明らかにしたい。

第 4 室 (地域連携センター第3セミナールーム)

司会 佐賀大学教授 早瀬博範

1. *Shadows on the Rock* における理想郷の創造

九州産業大学准教授 志水智子

Willa Cather の *Shadows on the Rock* (1931) は1697年のフランス領ケベックを舞台としている。主人公 Euclide Auclair の静的で安定感に溢れる幸福な生活を描くことで、Cather は開拓移民にとっての一つの理想郷をこの作品において構築し、提案していると考えられるのである。

まずこの作品において強調されるのは、「守られる」立場にある人々の存在である。ケベックの町自体も要塞のように孤立し、変化からは守られた土地として描かれる。

Auclair はフランスで親世代から受け継いだ職業によって生活を保障され、開拓地の状況に左右されることはない。この作品中で描かれる「開拓者」たちは、孤独で自己犠牲的で、自らの身を挺して人々の苦労を背負ってくれる存在である。Auclair を含むケベックに住む人々は、こういった開拓者たちによって社会的にも精神的にも庇護された存在として浮き上がるのである。

Auclair の生き方と幸福感を描くことで、Cather はヨーロッパ文化の滋味と新開地カナダの自由と平和とを融合した理想郷を創造し、提示していると考えられるのである。

2. ホールデンとダック——*The Catcher in the Rye* と“*I'm crazy*”

熊本県立大学大学院博士前期課程 鳥養志乃

アメリカ人作家、J. D. サリンジャー(1909-2010)の唯一の長編『ライ麦畑でつかまえて』は1952年に出版されてから今日まで沢山の若者に支持され、研究されてきた。しかし『ライ麦畑でつかまえて』研究において重要なイメージが見過ごされている。それは作中で主人公・ホールデンが四度も考える「セントラル・パークの凍った湖の上のダックたち」である。

本発表ではまず、『ライ麦畑でつかまえて』のモデルとなるサリンジャーの「気遣いの僕」という短編からダックのイメージが登場し、『ライ麦畑でつかまえて』と合わせダックは二作品の中でホールデンの孤独感を表す重要なイメージとして使われていることを確認する。また、二作品の中のダックの表象性が異なっていることを指摘する。そして『ライ麦畑でつかまえて』におけるホールデンの三日間の放浪、その後の人生においてダック像がどのように関係し、何を暗示しているのかを述べる。

司会 九州大学教授 高橋 勤

3. 「父」のいない世界——『誰がために鐘は鳴る』におけるヘミングウェイの父性観

九州大学大学院博士後期課程 日下幸織

20世紀前半のアメリカ社会は、女性の社会進出が目立つと同時に、男性が「家父長」としての地位を失いつつある時代であった。「父」の弱さや「父」の不在はジョン・スタインベックやF. スコット・フィッツジェラルドなどの1930年代の作品に影を落としている。

本発表ではアーネスト・ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』(1940)における作家の父性観について考察する。執筆当時の時代状況を考えると、主人公の父が自殺しており、主人公がその死に方に幻滅を感じていることは重要である。また、政治や宗教に自らの生き方(や死に方)の指針を求め、揺れる(つまり象徴としての「父」を求め、不信を抱いている)人物たちが描かれていることを考えたとき、この作品における「父」の重要性が確認されるだろう。

批評家ともども白人男性として父権的な作家像を構築してきたヘミングウェイではあるが、多くの作品において、父に対する思い、父になることへの思いは複雑である。「父」の権威が揺らぐ社会状況のなかでの、作家の「父性」に対する意識を読み取りたい。

司会 熊本県立大学准教授 坂井 隆

4. 指先の詩学——*The Glass Menagerie* における劇化・演出の戦略

九州大学大学院博士後期課程 幸山智子

The Glass Menagerie (1944年初演)における手指や触覚の描写を考察することは重要である。冒頭で作品の社会的背景を説明する Tom によって視覚と対置されている指先の感覚は、作品の終わりの独白においては姉 Laura の存在を呼び覚ますものとして描かれている。さらに、姉弟の関係性を題材にした Williams の短編におけるタイプライターとピアノの描写を検討すると、指先を基点として姉弟の姿は二重写しになり、弟の同性愛的欲望や「ことばを書く」という行為が姉との一体感に由来していることがわかる。

本発表においては、指先の感覚がもたらす他者や外界との相互作用を明らかにし、対話的關係性の中で詩的空間を構築しようとする Williams/Tom の劇化・演出の戦略を検討する。その戦略を当時のアメリカ演劇における演技・演出技法の革新と照らし合わせることで議論を掘り下げ、作家の社会意識をあぶりだす。

司会 九州大学教授 小谷耕二

5. アメリカン・ルネサンスにおける身体と機械—アフォードダンス表象を中心に

鹿兒島大学教授 竹内勝徳

Herman Melville の *Moby-Dick* において、片足の Ahab 船長が捕鯨ボートで巨大な白鯨と戦うシーンが迫力たっぷりに描かれる。Ahab の片足は義足であり、ボートは激しく揺れている。水中に投げ出され、義足も折れるのだが、付け替え、出撃し、最終的には渾身の力をこめて銚を白鯨に命中させる。その直前には Ishmael を含めて 3 人の漕ぎ手が投げ出されるのだが、Ahab は何とかバランスをとっていた。彼は、義足という道具を介して、ボートとの一体感を相当なレベルで実現していると言わなければならない。さらに言えば、Ahab たちのクルーが乗る捕鯨船ピークオド号は鯨を捕らえるだけでなく、鯨を解体し、その脂身を熱して鯨油を精製する生産工場でもある。捕鯨員たちは危険と隣り合わせになりながらも、高度な技術により、洋上で揺れる船の動きや傾きに身体を馴染ませ、バランスをとって作業を進めている。ピークオド号とは、人間の身体がモノや機械の動きに同期し、一体化することで成り立っている工場機械なのである。

19 世紀中葉のアメリカ北部州では機械産業が進展し、工場労働者が大幅に増えていった。Melville の “The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” が製紙工場の女性労働者を描いていることは言うまでもない。同時に、スエーデンボルグの神秘思想や、疑似科学、心霊現象を題材とした見せ物が流行することで、人々は人間の身体と魂は分離しうるのか、あるいは、魂とモノの関係は成り立つのか、などという興味を深めていったと言える。機械文明の進行と身体への意識が高まり、アメリカン・ルネサンス文学では、様々な次元で身体と機械（モノ）の関係性が描かれるようになった。しかし、現代の科学から振り返ると、こうした側面は当時の言葉で語られているだけで、実はきわめて斬新な視点で人間の身体のあり方を描いているとも言える。本発表では、意識や思考を超えて生成される身体とモノのインターフェイスを探った James Gibson のアフォードダンス理論を取り入れて、アメリカン・ルネサンス文学における身体と機械の関係を論じてみたい。

第 5 室 (地域連携センター第1 セミナールーム)

1. 【発表なし】

司会 熊本大学教授 登田龍彦

2. DP の定性制限とその獲得について

九州大学専門研究員 團迫雅彦

本研究は *there* 構文における DP (determiner phrase) の定性制限 (definiteness restriction) を取り上げ、英語を母語とする幼児の言語発達のどの段階で定性制限が発現するのかについて考察する。定性制限とは(1a,c)のように不定 (indefinite) の DP は *there* 構文に現れることが許されるが、(1b,d)のように定 (definite) の DP の場合は容認不可能になることを指す (Milsark 1977 など)。このような名詞句に付加する決定詞 (determiner) は定性に関して二種類に分けられる。不定を表す決定詞は *a* や *some* だけでなく、基数や無冠詞を指し、「弱い」決定詞 (weak determiner) とされる。一方で、定を表す決定詞は *the* や *every* に加えて、指示詞や所有格も含めて、「強い」決定詞 (strong determiner) と呼ばれる。

- (1) a. There seems to be a fly on the desk.
b. *There seems to be the fly on the desk.
c. There are some flies on the desk.
d. *There is every fly on the desk.

英語を母語とする幼児の場合、言語発達の過程において、こうした二種類の決定詞を限られた言語入力から区別し、(1a,c)のみを可能にする文法にする必要がある。本研究では、幼児の言語発達において名詞句の統語構造がどのように発達するのかも射程に入れて、定性制限の発現について考察する。

3. 三部門並列モデルに基づく省略現象への一般的アプローチ——文断片から VP 削除へ

九州大学大学院博士後期課程 永次健人

本発表では、三部門並列モデルに基づく省略現象の統一的な分析の可能性を検討する。具体的には、Culicover and Jackendoff (2005) の文断片の分析を発展させ、VP 削除に拡張することを試みる。Culicover and Jackendoff (2005) は、三部門並列モデルに基づく直接生成分析を展開したが、省略現象ごとに個別の構文規則を立てており、統一的な分析を提示できていない。ここでは、三部門並列モデルの下では焦点要素のみを統語構造上に生成することが許され、その場合に省略現象が生じると論じる。この直接生成分析では、文断片が省略現象の典型となり、Gapping や Sluicing に拡張されるが、VP 削除が問題となる。直接生成分析では、削除分析と異なり、残留要素が操作の対象となるが、VP 削除では残留部分が構成素を成していないからである。本発表では、VP 削除も三部門並列モデルの下で生成できること示すとともに、これまで統語論で省略に関連して議論されてきた種々の問題が直接生成分析において扱えるかも議論する。

4. 17世紀『狐物語』の受容—イリノイ大学図書館所蔵コピーの謎

福岡女子大学大学院博士後期課程 都地沙央里
福岡女子大学教授 向井 毅

1481年にWilliam Caxtonが自らフラマン語から翻訳し、印行した『狐物語』は、続く16世紀の間も、本文が大きく編集されることなく再版がくり返され、広範な読者層から愛読された。その後、Caxton版の全43章が25章へと大幅に改められ、欄外に読者の読みを誘導するような教訓を付したEdward Allde (1620)による改訂縮約版が出版され、さらに広く読者を獲得して1662年までの約40年間に、4人の異なる印刷工によって7度の再版を見ることとなった。

こうした『狐物語』の流布は、17世紀後半にはストーリーの拡張へと展開されていく。物語の受容を考えるうえで、興味深い版がイリノイ大学図書館に所蔵されている。

「1667年出版」(Wing)とされるT. Ilive版がそれである。所蔵コピーのタイトルページには、‘To which may now be added a Second Part of the said History: As also the Shifts of Reynardine the Son of Reynard the FOX’の記述があり、先行する縮約版で描かれた狐レナルドのその後を語る物語の第2部、そして彼の息子レナルディンの行状を語る第3部の追加(予告)が、その粗筋とともに記載されている。しかし当該の第2部の標題紙は1681年のAnne Maxwell版であること、第3部の標題紙は1684年のThomas James版であることから、イリノイ大学図書館コピーは後代に2つの続編を付け足して綴じられた合冊本であるということになる。それではなぜ、「1667年版」のタイトルページに、まだ書かれていなかったはずの第2部と第3部の存在が謳われているのか。また、ESTC (Pollard&Redgrave²及びWing²にもとづく書誌情報)には、1667年前後に第2部と第3部が出版された記録の記載もない。

本発表では、17世紀の『狐物語』受容史を鳥瞰しながら、T. Ilive版のタイトルページの謎を探る。

5. 調整と手続き的制約——関連性理論からみた after all と「だって」

九州大学准教授 大津隆広

関連性理論において、談話連結語はそれを含む発話の解釈への推論を制約する言語表現であると捉えられている。その枠組みにおいて、英語の談話連結語 after all は既存の想定を強化するという手続き的制約をコード化していると一貫して規定されてきた。同様に、日本語の接続表現「だって」は、談話的分析により正当化という関係で先行節をつなぐ言語表現として一般的に捉えられている。こうした従来の分析は、手続きそのものが結論と証拠(理由説明)という2項表示に基づいていることを意味している。

本発表では、2つの言語表現はともに話し手と聞き手の2つの想定への調整に貢献する手続きをコード化した言語表現であると主張し、3項説明を提案する。さらに、関連性理論の枠組みにおいて、両者を調整標識(modulation marker)として位置づけたい。調整という手続き的制約を規定することで、2つの言語表現の多様な用法を一義的に説明し、一つの言語表現が異なるコンテキストに生じる理由を説明することができる。

特別講演（地域連携センター第2セミナールーム）

司会 福岡女学院大学大学院教授 吉田 徹夫

演題 お化けの行列

講師 青山学院大学教授 富山 太佳夫（とみやま たかお）

講演内容

個人的には別にお化けや妖怪、怪物などが好きなわけではないが、文学作品の中で繰り返しそれに出会うとなると、やはりそれなりの関心を抱かざるを得ないということになる——研究者の義務として。

しかも、他の地域の文学と較べて、イギリス文学にはずっと多くのお化けがついてまわるような気がする。げんに『ハムレット』にも、『クリスマス・キャロル』にもお化けが登場するとなると、シェイクスピアとディケンズの名前がその出現を正当化しているようにも見えてしまうのだ。『フランケンシュタイン』にしても、『ドラキュラ』にしても、それらの作品とインターテキストを構成して、更なる場を用意しているようにも思えてしまう。ポストモダンの小説家 Peter Ackroyd の *The English Ghost: Spectres Through Time* (2010) を手にしても何の違和感もないのは、そのためだろうか。

いずれにしても、ヴィクトリア時代のお化け小説の前にあった18世紀のゴシック小説と、そのあとに来るSF小説の間の数多くの奇妙な小説は、文学史的にはどう位置づければいいのか。そして、推理小説とそれとの関係は？ *The Strand Magazine* には、ホームズ物語のそばに“Ghosts”というエッセイがならんでいたりする。お化けは大人向け、子供向けのあらゆるジャンルと共存し、相互浸透する力をもっていたということだろうか。ヴィクトリア時代の諸小説家にとって、お化け小説はどんな可能性をもっていたのだろうか。お化けと向き合うことはどんな意味をもっていたのだろうか。

そもそもお化けは何処にいたのだろうか。古ぼけた田舎の屋敷だけだろうか——それとも、見知らぬ異国の地にもいたのだろうか。そうだとすれば、それは植民地問題や人種問題とも通底していたということだろうか。 *A Tale of Two Cities* の冒頭を読み出しただけで、私はそんなことまで考えてしまう。

講師紹介

富山 太佳夫

1947年鳥取県西伯郡日吉津村生まれ。鳥取県立米子東高等学校を経て、東京大学英文科卒業。1973年同大学院修士課程修了、同大助手、お茶の水女子大学助教授、成城大学教授を経て2001年現職。

1993年『シャーロック・ホームズの世紀末』で芸術選奨新人賞、2004年『書物の未来へ』で毎日書評賞受賞。20年以上に亙り毎日新聞書評者を務めた。専門はヴィクトリア朝小説を中心とした英文学および文化研究だが、文学理論や現代思想、歴史研究にも造詣が深い。日本におけるイギリス小説研究の第一人者。

著書として、『テキストの記号論』（南雲堂 1982年）、『方法としての断片』（南雲堂 1985年）、『シャーロック・ホームズの世紀末』（青土社 1993年）、『空から女が降ってくる——スポーツ文化の誕生』（岩波書店 1993年）、『ダーウィンの世紀末』（青土社 1995年）、『ポパイの影に——漱石/フォークナー/文化史』（みすず書房 1996年）、『『ガリヴァー旅行記』を読む』（岩波書店 2000年）、『文化と精読——新しい文学入門』（名古屋大学出版会 2003年）、『書物の未来へ』（青土社 2003年）、『笑う大英帝国——文化としてのユーモア』（岩波新書 2006年）、『英文学への挑戦』（岩波書店 2008年）、『おサル系の譜学——歴史と人種』（みすず書房 2009年）、『文学の福袋〈漱石入り〉』（みすず書房 2012年）等。

訳書として、ウィリアム・ライター『神話と文学』（紀伊國屋書店 1976年）、チャールズ・ロバート・マチューリン『放浪者メルモス』（国書刊行会、1977年）、ヴァン・デル・ポスト『影の獄にて』（由良君美と共訳、思索社 1978年）、トマス・アルバート・シービオク『シャーロック・ホームズの記号論』（岩波現代選書 1981年、同時代ライブラリー 1994年）、アーサー・コナン・ドイル『バスカヴィル家の犬』（東京図書 1982年、ちくま文庫 1997年）、ド・クインシー他『悪魔の骸——ゴシック短篇集』（小池滋共編 ゴシック叢書：国書刊行会 1982年）、スーザン・ソントグ『土星の徴しの下に』（晶文社 1982年、新版みすず書房 2007年）、スーザン・ソントグ『隠喩としての病い』（みすず書房 1982年）、ヴァン・デル・ポスト『内奥への旅』（思索社 1983年）、エドワード・ブルーワ=リットン『ザノーニ』（村田靖子と共訳、国書刊行会 1985年）、ロバート・スコールズ『記号論のたのしみ——文学・映画・女』（岩波書店 1985年、新版 2000年）、クリストファー・ノリス『ディコンストラクション』（荒木正純と共訳、勁草書房 1985年）、ジョナサン・カラー『ディコンストラクション』（折島正司と共訳、岩波書店 1985年、岩波現代文庫上下、2009年）、キャサリン・ダルシマー『思春期の少女たち——文学にみる成熟過程』（三好みゆきと共訳、岩波書店 1989年）、スーザン・ソントグ『エイズとその隠喩』（みすず書房 1990年）、マリー=ルイス・フォン・フランツ『世界創造の神話』（富山芳子と共訳、人文書院 1990年）、ジェーン・ギャロップ『ラカンを読む』（椎名美智・三好みゆきと共訳、岩波書店 1990年、新版 2000年）、ジョナサン・カラー『ロラン・バルト』（青弓社 1991年）、イーヴリン・ウォー『大転落』（岩波文庫 1991年）、ポール・ド・マン『理論への抵抗』（大河内昌と共訳、国文社 1992年）、ジョン・グロス『ユダヤの商人シャイロック』（越智博美と共訳、青土社 1998年）、エレイン・ショウォールター『性のアナーキー——世紀末のジェンダーと文化』（共訳、みすず書房 2000年）、ソントグ『火山に恋して ロマンズ』（みすず書房 2001年）、ピーター・ゲイ『快樂戦争——ブルジョワジーの経験』（青土社 2001年）、ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』（岩波書店 2002年）、スーザン・ソントグ『書くこと、ロラン・バルトについて エッセイ集 1（文学・映画・絵画）』（みすず書房 2009年）スーザン・ソントグ『サラエボで、ゴドーを待ちながら エッセイ集 2（写真・演劇・文学）』（みすず書房 2012年）等。